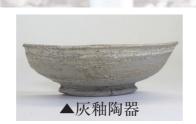
## 焼き物の種類

5世紀前半に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされた窖 窯で高温焼成された青灰色、灰黒色の焼き物



## 灰釉陶器

9世紀に猿投窯で開発された国産初の高火度焼成の施釉陶 器。植物の灰を釉薬に用いて刷毛で塗り、窯内で高温焼成する と、表面が融けてガラス質になります。



# やまちゃわん山茶碗

尾張、東濃、渥美・湖西、遠江、美濃須衛といった種類の違う山茶 碗が現在確認されています。



11世紀末頃に出現する灰釉技法(釉薬)のない無釉の焼き物。

# 令和3年11月中旬から埋蔵文化財担当の職 ケ谷古窯跡群の 分布調査を行っ 7 います

て調査を行い、今後成果報告できるよう整理ありますが、新規発見の窯や既存の窯につい開発に伴って滅失してしまっている窯跡も 攻する大学生とともに井ケ谷地区、東境地区 員と、愛知学院大学・名古屋大学で考古学を専 にある窯跡の分布調査を行っています。



▲井ケ谷古窯跡群分布調査の様子

# 井ケ谷窯の衰退 中世 の様子

基と窯の数でも顕著に表れています。井ケ谷窯も洲原池周辺を離れ、泉田町や豊井ケ谷窯77基の中で、須恵器、灰釉陶器の窯が56基なのに対し、山茶碗の窯は21 ます。さらに三河国では、渥美窯も活発な生産を始めますが、山茶碗の大規模な生 産を行っていなかった地域にも窯が築かれ始めます。猿投窯地域では鳴海地区に 産が始まると井ケ谷窯は次第に衰退していきます。 含まれる有松地区や、知多半島では中世最大の窯業地となる常滑も操業を開始し として焼かれています。山茶碗生産が始まると生産量が爆発的に増大し、窯業生 猿投窯の製品が高級陶器としての価値を持っていたのに対し、山茶碗は日常食器 11世紀末に山茶碗の窯が築かれ、無釉の碗、皿が大量生産されます。それまでの

うかがえましたが、中世窯に転換することなく、井ケ谷窯は生産を終了しました。田市花園町などで山茶碗生産を試みており、中世の窯への転換に努力したことが かがえましたが、中世窯に転換することなく 井ケ谷窯は生産を終了

に入ってからとなります

▲伊勢山中学校遺跡出土品 (名古屋市教育委員会蔵 写真提供:名古屋市博物館

在の東郷町)に1基、黒笹地区に2基あり、東他の地域では、鳴海地区に5基、折戸地区(現

の窯は見つかっていません。

山・岩崎地区(現在の日進市)には、この時期

ケ谷窯の窯は2基確認されており、猿投窯の より開窯したと考えられます。この時期の井 の期待を担って、黒笹地区からの技術伝播に ました。井ケ谷窯はその時期に灰釉陶器生産 しい窯業が大規模に展開されようとして

# 井ケ谷窯のはじまり

産が本格的に始まるのは、約30年後の8世紀屋市東部の東山地区に限られ、井ケ谷窯で生猿投窯が始まる5世紀中頃は、窯跡は名古

辺)に移っており、

灰釉陶器を主体とする新

および鳴海地区(現在のみよし市、豊明市

8世紀中頃から猿投窯の中心は黒笹地区

せんが、5世紀に猿投窯が開窯したと考えら 須恵器を焼いた窯跡はまだ発見されていま 窯産の須恵器と考えられています。これらの

を持つ

朝鮮半島で生産されたものとは違った特徴 台地やその周辺の集落の跡からは、陶邑窯や えられています。伊勢山中学校遺跡など熱田 地方でも尾張で須恵器生産が始まったと考

須恵器が出土しており、最も古い猿投

▲西石根第7号窯出土須恵器

▲石根第5号窯出土品 (写真提供:愛知県陶磁美術館)

# 井ケ谷窯 の最盛期 古代 0) 様子

猿投窯

はじまり

ど、硬い焼き物である須恵器の技術もその 術が日本に伝来しました。鉄製の農具やか

が日本に伝来しました。鉄製の農具やかま5世紀に朝鮮半島から先進的な文物や技

本格的に生産が始まりました。同じ頃、東海

須恵器は、5世紀に大阪府堺市の陶邑窯で

と考えられています 産国と並んで、三河国が挙げられているの 阪府)、尾張、備前 (現在の岡山県)の須恵器生 る「陶器貢納国」として河内、和泉(現在の大を反映しています。『延喜式』に記載されてい 窯が三河の窯業を支える存在となり、大規模 あった豊橋市南東部地域に代わって、井ケ谷 われます。これまで三河国の窯業の中心地で あったことと深い関わりを持っていると思 ととは異なり、井ケ谷窯が三河国の窯業地で とは、猿投窯の他の地域が尾張国に属するこ 区や鳴海地区に匹敵するほどでした。このこ は、この井ケ谷窯の発展が背景にあったため な生産の拡大が行われるようになったこと し、その生産量は猿投窯の主体と成す黒笹 9世紀前半です。この時期に生産を拡井ケ谷窯が最も発展するのは8世紀末 時期に生産を拡